情報

SHINICHI KUSHIMA

九島伸一

情報の光と影を
知ることが
21世紀を
生き抜く知恵だ。

国家・企業間の熾烈な情報戦争、メディアに潜む大衆操作……人々を翻弄する情報が溢れているけれど、ひとりでも多くの人が情報を選びとる能力を身につけ、騙されたり、利用されたりしないで、笑って暮らすことができたらと思う。

データ・情報・知識のエキスパートとして30年国連で活躍した著者が
情報の本質に迫った珠玉のエッセイ。

GENTOSHA 幻冬舎 MC

定価（本体1800円＋税）

情報

SHINICHI KUSHIMA

九島伸一

幻冬舎
MC

はじめに

情報について書こうと思っている。情報とはなにか。知識とはなにか。事実とは、そして真実とは。リアル、バーチャル。良い、悪い。正しい、正しくない。情報は、私たちひとりひとりにとって、どんな意味を持つのか。どうすれば騙されずに済むのか。

「人は、騙されるようにできているのではないか」と思わせるほどに、みんな、いとも簡単に騙される。騙すほうが悪いとか、いや騙されるほうが悪いとか、いろいろなことが言われているけれど、誰がなにを言おうとも、人は騙され続ける。

ある国の人たちは口を揃えて、隣国がしていることを「ひどい」と言う。その隣国の人たちもまた、同じようなことを言う。両方の国の人たちが、いとも簡単に、それぞれの国家のプロパガンダに乗せられている。プロパガンダに乗せられるのは、そんなにも心地よいものなのか。

騙されないために、個人個人が情報リテラシーを身に付ける。それしか方法はないという。ところが情報リテラシーの教育をしているのは騙す側の人たち。騙される人たちを養成しているのだ。教わった通りにしていたら、いつまで経っても、情報リテラシーは身に付かない。

では、どうしたらいいか。

まずは、情報についてもっと知る。それだけを試みてみようと思う。知らなければ、なにも始まらない。

情報のことを考え続ければ、なにかが見えてくるかもしれない。そう信じて、知る努力をしようと思う。
もしかしたら、なにも見えてこないかもしれない。でも、それはそれでいい。
情報について考える。今はそれだけでいい。

情報・目次

はじめに 1

第1章 データ、情報、知識、知恵 9

1・1 情報について 10
1・2 いろいろな4層モデル 22
1・3 なにが起きているのか? 40
1・4 では、どうしたらいいのか 46

第2章 量、質、時間、空間 53

2・1 データの量 54
2・2 情報の質 66
2・3 知識の変化 119
2・4 知恵の広がり 128

第3章 検索、入力、処理、出力 147

3・1 サーチ 150
3・2 インプット 181

3・3 プロセス……207
3・4 アウトプット……229

第4章 変化、共有、発信、プロパガンダ……259

4・1 情報環境の変化……260
4・2 情報の共有……274
4・3 情報の発信……292
4・4 プロパガンダ……303

第5章 正確さ、事実、正しさ、真実……315

5・1 正確な情報……316
5・2 正確にみえる情報……325
5・3 正確でない情報……344
5・4 正しい情報……379
5・5 正しく見える情報……404
5・6 正しくない情報……431

第6章　ある、ない、リアル、バーチャル　457
6・1　リアルの変質……458
6・2　リアルへの不信……479
6・3　リアルの混沌……501
6・4　リアルの消滅……522

第7章　情報戦争、メディア、情報商品、図書館　555
7・1　情報戦争……556
7・2　メディア……579
7・3　情報商品……587
7・4　図書館……594

おわりに　617
人名索引　619

情報

第1章　データ、情報、知識、知恵

1・1　情報について

情報の捉え方

ビジネスという枠組みで物事を捉える人たちにとっては、情報は手段であり、道具であり、目的である。情報収集も、情報分析も、情報発信も、そして情報技術への過剰ともいえる投資も、すべては儲けるため。

ビジネス環境では、情報が大きな役割を果たしている。正しくない情報を出しても、それが自分たちの利益に繋がるのであれば、それは悪ではない。でも逆に、情報のせいで売り上げが下がったり、自分たちのイメージが悪くなったりすれば、それは悪と見なされる。

軍事やセキュリティーという枠組みで物事を捉える人たちにとっては、自分たちの情報は守るべきもの、敵や犯罪者の情報は手に入れるべきもの。ごく自然にそう考えるようになるという。

愛する人たちを守るために敵を殺したり、無辜の市民たちを守るために犯罪者を殺したりするのが正義だというのと同じように、自分たちの情報の壁を強固にして情報の流出を防いだり、敵や犯罪者の情報の壁を破って情報を手に入れるのも正義ということになる。

国家という枠組みで物事を捉える人たちにとっては、情報は国家のためのもの。国民のものではない。国家は、国内ではプロパガンダを行い、国外では情報戦争を闘う。国内での敵はプロパガンダに対抗する人たちであり、国外での敵は同じ情報戦争を闘う同業者である。

長期的に見れば、グローバリゼーションが進み、国家の必要性はなくなっていく。国家がなくなれば、国

境もなくなる。国境がなくなれば、プロパガンダも情報戦争も意味をなさない。

なので、国家は必死になってプロパガンダを行い、延命を図る。国境の問題を誇大に伝え、隣国の国民との反目を煽(あお)れば、国家は安泰なのだ。国家と国家の交渉は嘘ばかりのコミュニティーのなかで行われるから、自分たちにとって有利な情報を自分たちだけで持つことができうる。

ＮＧＯとか市民団体という枠組みで物事を捉える人たちにとっては、情報は開示されなければならないもの。情報を隠すことは悪いこと、情報を隠す人は悪い人ということになる。そういう思考からは、有料の情報があるということなど、許せないに違いない。

そういう人たちが、メドライン（Medline）、サイエンスダイレクト（ScienceDirect）、プロクエスト（ProQuest）などという有料の情報の信頼性や有用性をどう評価するのかはわからない。ただ、「情報は無料でなければならない」、「すべての情報は市民のためにある」、「知的所有権は認めない」というような立場があることは理解できないでもない。

学術や教育という枠組みで物事を捉える人たちは、アカデミックなルールから外れた情報を、決して認めようとしない。情報の内容が正しいかどうかは別として、手続きを踏んでいるかどうか、約束事を守っているかどうかということが、とても大事にされる。

参考文献などの出典を明記するというようなことに始まり、情報を発表した人が所属する組織の名前とか、情報が発表された日時とか、発表された学術誌の格というような二次的な情報が、思いのほか重要な役割を持つ。

ビジネスを成功させようと日々努力している人が必要な情報、地域を犯罪から守ろうと走り回っている人が必要な情報、国を守ることに命をかけている人が必要な情報、弱者に寄り添い続けている人が必要な情報、学者として認められたいと身を削っている人が必要な情報。一口に情報といっても、それぞれがまったく違う。

それだけではない。情報は開示されるべきだと思っている人と、情報を守るために命をかける人とでは、話し合いは成立しない。情報は無料だと思っている人に「情報は有料だ」と言ってみても仕方がない。権威のあるところが書いたことをすべて鵜呑みにし、公式見解こそが正しいと言う人には、カール・ポパー（Karl Popper）の言う「客観的な真実（objective truth）」など、わかるはずがない。

政治について保守的な人とリベラルな人とがいるように、経済についてケイネジアンとシカゴ・ボーイズがいるように、社会について国家が大事だと考える人と個人が大事だと考える人がいるように、情報についても対立する考えを持つ人たちがいる。

今まで、情報についていろいろな本が出版されてきたけれど、日本では情報技術のことを書いたものばかりが目立つ。アメリカ、中国、韓国、ロシア、フランス、イギリスといった国で出版されてきた本も、それぞれの国の事情を反映してか、情報に対する興味は偏っているし、考え方もそれぞれの国でしか通用しないものが多い。

情報を、違ったパーセプションから捉え、俯瞰（ふかん）してみたい。そう思っている。

疑問

日本語ウィキペディアの「情報」のページに行くと、安西祐一郎の「情報とはなにかという問いに、ただひとつの答えを与えることは困難である」という文章が載っている。

困難だから考えない。考えても仕方がない。だいいち忙しいし、そんなことを考える時間はない。そんな感じの人は多い。でも私の場合には、「困難である」が始まりになった。情報とはなにかという疑問に、自分なりの答えを与えたい。そう思って、情報のことを考え、理解しようとする日々を過ごした。

しばらく考えてみて、「情報」と「インフォメーション（Information）」の違いに行き当たった。決して同じものではない。その両方が知りたくなった。「シンシー（信息）」も、「ジョンボ（정보）」も、そして「イ

ンファルマーツィヤ（Информация）」のことも知りたい。そう思った。
そうして浮かんできたのが、日本語の「情報」という単語が持っている特殊性。他の言語に比べ、大きくかけ離れている。おまけに、とても曖昧なのだ。
山本七平が書いたように「日本での最終的決定者は人ではなく『空気』だ」というのであれば、論理などというものはいらなくなり、また、「情報とはなにか」などということを考える必要もない。「『空気』対『情報』は、『空気』の勝ち」というのが日本なのだとしたら、日本では情報は必要ない。
日本にいて日本人として生きていくのに必要な「情報」と、グローバリゼーションのなかでひとりの個人として生きていくのに必要な「インフォメーション」は、同じものではない。日本を離れたら、「インフォメーションとはなにか」ということを考えずには生きてはいけない。
日本という閉じた社会のなかで、優しさ、思いやり、繋がり、助け合いというような「美徳」を大事にして生きていくのもいい。そうする時に、多くの情報はいらないかもしれない。でも、それでも、情報のことを考えることは、決して無駄ではない。

人はなぜ騙されるのか？

人は誰でも、情報に影響されながら生きている。時に、「騙された」という気分になる。ひとりで騙されるのならまだしも、集団で騙されるのはつらい。
よく「日本人は騙されやすい」というが、本当だろうか。世界中に騙されない人などというのはひとりもいないと思うが、本当に日本人は騙されやすいのだろうか。
藤原敬之は日本人のことを、「まわりに合わせる」、「自我を通さない」、「その場の雰囲気を壊すような反対意見を言わない」と形容した。
「まわりのみんなと同じように考える」というのであれば、情報は与えられたものだけで十分。なにも考え

ず、与えられた情報を信じて暮らす。それでいいのだから、楽なこと、この上ない。
もっとも、与えられた情報が間違っていたとなれば話は別で、「騙された」と声を上げる。
戦争に負ければ騙されたと言い、株価が下落すれば騙されたと言う。原子力発電所で事故があれば騙された、経済が悪くなれば騙された。騙されたほうが悪いのだと思う人は、ほとんどいない。
もっともこれは、日本人だけの特徴ではない。程度の差こそあれ、進んで騙される人は世界中のどこにでもいる。情報は与えられるものと思っている人、与えられた情報はいつも正しいと思っている人は、結局は騙される。
騙されるのを防ぐには、個人個人が情報リテラシーを身に付けるしかない。でも日本では、情報リテラシーを身に付けるのは、容易ではない。

情報リテラシーは身に付くのだろうか

「情報について考えるのはいいのだが、考えただけではなんにもならない」と言う人たちがいる。例えば、クリントン・ファンデーション（Clinton Foundation）は、「口先だけで実行に移さなければ、なんの意味もない」という。
「なんのための情報か」とか、「行動を伴わない情報には、意味がないのでは」、「結果を伴わない行動には、意味がないのでは」というような問いかけには、厳しい現実と直面し続けてきた政治家の姿勢が色濃く反映している。
そんなことを考えるなかで、「現場の真実」という言葉にめぐり合った。「理想のなかの真実」の対極にある言葉だ。「現場の真実」という言葉は、強い響きを持つ。「現場が言っていることだから」と言われ、黙ってしまう人は多い。でも本当に、現場こそが正しいのだろうか。そんな疑念が湧いてくる。
疑念といえば、「情報リテラシーを身に付ければ、それでいいのか」という疑念も、なかなか晴れない。「日

本では、情報リテラシーを身に付けるのは、容易ではない」と書いたが、そもそも情報リテラシーがなんなのかという基本的なことでの合意がない。

合意がないということを説明するために、日本財団の図書館のサイトに載っていた地方自治情報センターの報告書のなかの「情報リテラシー育成についての考え方」を例として取り上げてみる。

情報化の基礎的能力として、「情報システムを導入しても、職員が使えないと何にもならない。また、パソコンが使えればそれで良いという訳でもない。すべての職員が情報を適切に取り扱い、情報から知恵を取り出すとともに、その知恵を持ち寄って事務事業に反映させていくことが必要なのである」と書いてある。そして、「横須賀市では、職員は、パソコンを立ち上げ、各情報システムの基本的操作ができることが、仕事の前提条件となっている。このことに加えて、データ・セキュリティーや個人情報の取り扱いについて理解していること、ネットワークにおけるルールやマナーを身に付けていることなどを情報化の基礎的能力、即ち基礎的情報リテラシーと定義している」と続く。

この文章へのコメントは控えるが、これが日本でいうところの「情報リテラシー」なのだ。ここでは、小平さち子の文章を引用することで、コメントの代わりにしようと思う。

小平さち子は「メディア・リテラシーとは、メディアにアクセスする能力、メディアおよびメディアコンテンツの異なる側面を理解して、クリティカルに評価でき、さまざまな文脈においてコミュニケーションができる能力である」と書く。さらに、「メディア・リテラシーは、メディアがいかに自分たちの物の見方や信念にフィルターをかけているか、個人の選択に影響を与えているかに対する認識を高めるのに役立つはずである」と続ける。

私たちひとりひとりが、クリティカルな思考と、クリエイティブな問題解決スキルを持ち、情報の賢明な利用者かつ発信者になること。そして、表現の自由と情報獲得の権利を手に入れること。そういうことがメディア・リテラシーなのだという。メディア・リテラシーが、民主主義の構築と維持の手段になるという考

え方だ。
長々と地方自治情報センターの報告書のなかの文章と、小平さち子の文章を引用したが、前者がＩＴリテラシーのことなのに対し、後者はメディア・リテラシーのことという違いがある。
どこの国でも、情報リテラシーといえば、小平さち子の書いているようなことをいう。情報リテラシーといって「ＩＴ初心者の心得」のようなことを並べるのは、日本だけではないだろうか。
小平さち子が問題にしているようなことが社会全体に行き渡らない限り、みんなが情報リテラシーを身に付けるなどということは起きようがない。

理想のなかにある真実

先程も書いたが、ここのところよく、現場の真実ということを耳にする。現場が言っていることだから正しいなどという。確かに現場にとっては、現場の真実だけが正しいだろう。でも現場にいない人たちにとっては、現場のことなどどうでもいいのだ。どうでもいいことであれば、それが正しいかどうかも、どうでもいいということになる。現場の真実を共有するのはとても難しい。
私たちが共有できるのは、現場の真実ではなく、理想のなかの真実なのではないか。宗教の真実であれ、バーチャルな真実であれ、理想を追ってのものなのであれば、真実として共有できるのではないか。
たとえそれが科学的に証明できないものであったとしても、たとえそれが正しくないものだとしても、私たちの多くは真実を必要としている。
人は、厳しい現実のなかでこそ、理想のなかの真実を必要とするものなのではないか。厳しい現実のなかの真実にとらわれすぎて、もっと大切なことを見過ごしているのではないか。
国の長は、国の理想を話さなければならない。国の理想は戦争をすることではなく、平和を目指すことだということを、示し続けなければならない。国の長はまた、国民の幸福を願い、国に関わるすべての人々を

幸せにしなければならない。国民を戦争に駆り出して死なせるなどは、もってのほかだ。

でも国の長は、国の理想を話す代わりに国の現実を話し、危機を煽る。隣国がどれだけひどいか、理不尽かということを、メディアを使って訴える。共に歩む代わりに、競い、争う。隣国と話し合うことはせず、話し合いができないのは隣国のせいだという。現場の真実ばかりに目を向ければ、待っているのは対立だけ。理想のなかの真実に目を向け、和解を目指すことはできないのだろうか。

会社の長は、会社の理想を話さなければならない。会社の理想は社長の給料を増やすことではなく、その会社にしかない使命を果たしていくことだと、実際に見せなければならない。会社の長はまた、社員の幸福を願い、会社に関わるすべての人々を幸せにしなければならない。社員を使い捨てにしたり不幸にするなどは、もってのほかだ。

でも会社の長は、会社の理想を話す代わりに会社の現実を話し、危機感を持つよう訴える。売り上げを増やし、利益を増やさなければ、明日はないという。モラルを下げてでも、人をないがしろにしてまでも、目先の利益だけを追い、会社の価値を高めることを忘れる。現場の真実に終始せず、理想のなかの真実に目を向けることはできないのだろうか。

学校の長は、教育の理想を話さなければならない。教育の理想は、役所の言うことを聞くことではなく、希望を語ることだということを、実践しなければならない。学校の長はまた、あらゆる自由を守り、学校に関わるすべての人々を幸せにしなければならない。学ぶ人たちの誠実を裏切ったり心に傷を負わせたりなどは、もってのほかだ。

でも学校の長は、学校の理想を話す代わりに学校の現状を話し、危機を煽る。試験で良い点を取らなければ、良い学校に行かなければ、明日はないという。本質を教えることはさせず、見せかけの「学問のようなもの」と試験のためだけの姑息な手法だけを教えさせる。現場が直面する教育の子細だけに終始せず、教育の理想に目を向けることはできないのだろうか。

現場の真実などというものは、所詮、偽りの真実でしかないのではないだろうか。理想のなかの真実を追わずに、なにが真実か。現場が、そして責任ある地位に就いた人たちが、理想を忘れたら、本来の目的を忘れたら、なにも良くはならない。

税金を進んで納めたいと思う人が、たくさん住んでいる国。そういう国がある。国から逃げ、他国に住んでいる人たちを追ったりはしない。残った人たちが、高い税金を払い、より良い社会を築いていく。北欧の国々では、多くの人が税金を払いたいと思っている。それが理想を追う人たちの住む国の姿だ。

進んで税金を納めたいとは思わなくても、隣国に納めるよりは自国で納めたほうがマシだと思う人が住む国もある。フランスとスイスの国境の両側でガソリンの価格を比べれば、スイスのほうがずっと安い。それなのにかなりの数のフランス人が、フランス側のガソリン・スタンドで、高いガソリンを買う。ガソリンの値段の半分以上が税金だと知っているから、スイスに税金を払うよりはフランスに払いたいという気持ちなのだという。積極的ではないにしろ、どうせ納めるのなら自分の国に納めたいということだ。

もっとも、日本で税金を進んで納めたとしても、変なことに使われてしまうのだから、たまらない。私たちは長いあいだにわたって、誰も入らないような黄金の風呂を買ったり、使われることのないレース場を作ったりする役人たちを、たくさん見てきた。たくさん見たあとで、誰も税金を払いたいとは思わない。それが現実を追う人たちが住む国なのだ。

みんなから税金を搾り取ることばかり考えても、人は必ず抜け穴を見つける。例えば、海外に住んでいる日本人の金持ちたち。日本で税金を払いたいと思えば、海外に住んだりなどしないだろう。罰則を設けたり、監視を強めたりすることばかり考えていないで、どうしたら、「みんなが税金を払いたくなるような社会」を作ることができるのか。そのことを、真剣に考えることは、できないのだろうか。

現場の真実からは、明るい未来は浮かんでこない。理想のなかの真実に目を向け、魅力ある社会をデザインしていけば、私たちを覆っている暗さは徐々に消えていく。そう信じてもいいのではないか。そして情報

が、理想を実現するための多くの情報が、社会に満ち溢れることこそが、幸せに繋がるのだ。そう思ってはどうか。

情報はあればいいというものではない。すべての情報が「明るくて、理想を目指したもの」ならばいいというものでもない。まずは「情報とはなにか」というところから始め、情報のなかから明るい未来に繋がるものを選ぶ能力を身に付ける。ひとりでも多くの人がそんな能力を持ち、笑って暮らすことができたらと思う。

情報のことをもっと知る、それが知識。そして、騙されたり利用されたりしないで暮らす。それが知恵というものだ。なにもしないでいて、楽しく暮らせればいいのだが、最低限の知識と知恵を身に付けておかないと、生きてはいけない。そんな社会に、私たちはいる。情報リテラシーこそがひとりひとりの幸せに繋がっていくのだと思う。

私なりの答え

「情報とはなにか」という問いにどう答えるか。私は、数ある答えのなかからひとつを選んだ。「情報とは、整理され伝えられるデータだ」というマーク・ポラット（Marc Porat）の言葉だ。この言葉が一番しっくりきた。だからそれを、「情報とはなにか」という問いへの私の答えにした。

いろいろとサーチをすれば、多くの人たちが、以下のような4層モデルを使っているのに気付くだろう。

データ：意味のない事象。ビット、数字、文字などで表される。

情　報：集められ、整理されたデータ。伝えられ、利用される。

知　識：消化され理解された情報。集団で共有される。

知　恵：広く受け入れられた知識。人類で共有される。

データが集められ整理されたのが情報。情報が消化され理解されたのが知識。知識のうち全人類に受け入

れられるようなものが知恵。そういうモデルだ。これを基にすれば、ジェイムズ・グリック（James Gleick）が言っているように、情報は知識ではなく、知識は知恵ではない。そしてデータは情報ではないということになる。

たまたまだが、勤め先では、データの仕事を10年、情報の仕事を10年、そして知識の仕事を10年して、それで給料をもらってきた。それでも実際のところ、私はなにも知らないし、なにもわからない。ただ、考えるベースになるものは持っていると思う。

意識したことはなかったけれど、どんな仕事をするにもこの4層モデルを使ってきた。だからそれがしっくりくる。

考えてみれば、使ってきたシステムはどれも、この4層モデルをベースにしたものだった。使っているあいだは使うことに忙しく、そんなことは考えもしなかったのだが、使わなくなってその本質に気付く。道具というのは面白い。

データとはなにか、そして情報とはなにかということを考える時、人それぞれの環境や置かれた立場により観点が違ってくるのは当たり前のことだ。実際、「データとは」とか「情報とは」というような文章はたくさん目に入り、ここ数年のあいだに集めただけでも数千に上る。

ロジャー・ボーン（Roger E. Bohn）とジェイムズ・ショート（James E. Short）の「データや情報を消費という観点から見るモデル」には、「少し古いんじゃない？」と思いながらも、なんとなく惹かれてしまう。エマニュエル・ジュスト・デュイ（Emmanuel-Juste Duits）が、データや情報を知るための道具とか社会参加の道具として捉え、知識共有こそが新しい力なのだ言われれば「そうだ、そうだ」と思ってしまう。

実際、どのモデルにも、どの考えにも、なるほどなあと思う。そもそも、どれが正しくて、どれが間違っているというようなものではない。どのモデルからも、どの考えからも、学ぶものは学び、それでも中心には上記の4層モデルを据える。そういうことで、書いていきたい。

データは嘘をつくというが、この４層モデルによればデータは嘘をつかない。そもそもデータには意味がないのだから、それが正しいとか間違っているとか判断することはできない。データの量は私たちが扱える範囲をはるかに超え、データ記憶装置の容量は２０１６年にはゼタ・バイトになるという。その膨大な量のデータのほとんどが、一度も使われずに消えていくのだ。嘘もなにもあったものではない。

私たちは「情報操作」という言葉を使う。英語では「メディア操作（media manipulation）」、ロシア語では「大衆意識の操作（манипуляция массовым сознанием）」、フランス語では「大衆操作（manipulation des masses）」という言い方のほうが、よく使われる。それぞれの言葉が意味するところは少しずつ違うけれど、どの言葉もあまり良い意味では使われない。

でもこの４層モデルを使っていると、情報操作を悪いこととは言えなくなる。私たちは日常生活のなかで、人と話し、手紙やメールを書き、用紙に記入するなどして、毎日のように情報を作り出し、それを扱う。言い方を変えれば私たちはみんな情報を操作し、人に影響を与えながら暮らしているのだ。そのことを、どうして悪いと言えるだろう。

知識というものの考え方も変わってくる。このモデルでは、個人の頭のなかにあるだけでは知識とはいえない。情報のバック・グラウンドを理解し、関連情報を知り、それを消化し、そして理解し、他人と共有できるようになって初めて知識というのだ。おいそれと、なにかについて知識があるなどとは言えなくなる。

そして、知恵。このモデルでは、ヨーロッパやアメリカから出てきた普遍的といわれる知識も、それが人類全体に受け入れられるものでなければ、知恵とは言わない。そのように考えると、人権や民主主義といった価値が普遍的なものなのかどうか、知恵と呼べるものなのかどうか、疑わしくなってくる。

ひとつの国家の言い分だけを無条件に支持する態度や、ひとつの宗教だけが真理であるという排他主義のなかからは、知恵は出てこない。幸いなことに私たちは、「殺さない」とか「盗まない」というような人類共通の知恵を持っている。この知恵を増やすことが私たちの幸せになるのだと考える人もいる。

私の考えの多くが私の個人的な経験に影響されているとすれば、私の考えは私にしか意味を持たない。それでも書いているのは、たぶんわかってほしいからではなく、情報とか知識とかを理解し、自分が長いあいだやって来たことを、本当の意味で終わりにするため。そんな気分でデータ、情報、知識、知恵のことを考えている。

1・2　いろいろな4層モデル

なにか少し違う感じの4層モデル

「データ、情報、知識、知恵」という4層モデルを基に情報のことを考えていると、「あれっ」と思うことがよくある。4層モデルにはいろいろなバリエーションがあり、一口に4層モデルといっても、人それぞれ、理解の仕方が違うからだ。もちろん、どれが正しいというものでもない。

トーマス・ダベンポート（Thomas H. Davenport）とローレンス・プルサック（Lawrence Prusak）の説明はあちらこちらで引用され、知識管理（knowledge management）を信奉する人たちのあいだには、このふたりの定義だけが正しいという人までいる。でもそれは、私の理解から一番遠い。このふたりの説明について、少しだけ考えてみたいと思う。

ダベンポートとプルサックは、客観的な事実が集まったのがデータだという。「なにかが、そこにある」とか、「なにかが、そこで起きている」、「誰かが、なにかをやっている」というような事実が集まって、データになるのだという。測ったり集めたりという形で人間が関わることはあっても、あくまでもばらばらな、

客観的な事実の集合体がデータなのだという。

私はこういう文脈で「客観的」とか「事実」というような言葉を使いたいとは思わない。データは「ある」こと、そして「起きている」ことなのであって、それが「客観的」かどうか、「事実」かどうかというような人間の考えとは、関係のないものではないか。整理されたり、分類されたり、吟味されたりしたものは、情報であってデータではない。私はそう考えている。

ダベンポートとプルサックは、「情報はメッセージである」ともいう。ふたりにとっては、文書も写真も、音楽も動画も、みんなメッセージだということになる。情報はメッセージだから、そこには当然、送り手と受け手がいるという。

これも私の理解とはずいぶん違う。受け手がいない情報、受け手がいることを想定していない情報、メッセージ性のない情報。そういう情報は、情報ではないというのだろうか。もっとも、ダベンポートとプルサックにはそんな意見は気にならないだろう。実際、情報はメッセージだということで話を進め、面白い本が出来上がっている。私はそれを否定しようとは思わない。ただ、違う理解をしていると、それだけのことを書いておきたいのだ。

ダベンポートとプルサックは、知識についてもまた、私の理解とはまったく違う考えを書いている。知識とは、「失敗することによって身に付いていく経験」や、「自分の価値とは違うさまざまな価値」、「ある状況になって初めて意味を持つ情報」、「専門的な洞察」などが混ぜ合わさったもの。そんな、とても流動的なものだという。蓄えられた知識は、新しい経験や情報を評価し、自分のものとするかどうかを判断し、適当なものは取り入れ、自分の知識を膨らませていく。ふたりにとって、知識とはそういうものらしい。

ふたりはそこでやめず、知識は、人の心から湧き上がってくるもの、人の心を動かすものだという。「知識は、頭で考えるもの」という私の理解とは、大きく違う。心から湧き上がってくるもの、心を動かすものは、知識ではなく知恵だというのが私の理解だ。だから、ふたりがなぜこのようなことを書くのかが、理解

できないでいる。

ふたりはさらに、組織のことを書く。知識は、文書やコンピューター・ファイルのなかにあるわけではなく、毎日の業務過程や業務処理のなかにあるという。私は逆に、毎日の業務過程や業務処理は、文書にしたり、コンピューター・ファイルにしたりすることが大事だと思っている。文書化したもの、ファイル化したものだけが、真に共有され、組織のなかに知識として残っていくという立場だ。

ダベンポートとプルサックは、知恵に関しては触れていない。その代わりに、経験というものを取り上げている。経験とは、私たちが今迄にしてきたこと、そして私たちに起こったことなのだという。経験により、なにがうまくいき、なにがうまくいかないかを知ることこそが、グラウンド・トゥルース（ground truth）の意味するところだという。

なにもこんな文脈のところにグラウンド・トゥルースなどという言葉を持ち出さなくてもいいのに。そう思ってしまう。リモート・センシングでグラウンド・トゥルースといえば、現場で集められたデータを基にした情報のこと。グラウンド・トゥルースをあえて日本語にすれば「現場の真実」ということになる。

私は、真実というのは主観だと思っているし、データ、情報、知識、知恵、経験というようなものをできるだけ分けて考えるようにしているので、ふたりの文章を読むのに膨大な時間が要る。そして、苦労して読んだあとに残るのが、なんだかなあという気分なのだ。

なぜダベンポートとプルサックのことを持ち出したのかといえば、それは、情報とか知識とかいうものについてのひとりひとりの理解がどれだけ違うものなのかということを示したかったからだ。

どれが正しい、どれが正しくないということではなく、私が使っている「データ、情報、知識、知恵」の4層モデルは、時として他の人が使っているモデルと大きく違うのだということを、そして時としてまったく同じものなのだということを書き留めておきたいと思ったのだ。

しっくりくる4層モデル

ビット、数字、文字など意味のない膨大なデータがある。そのデータが集められ、整理され、意味を持ったものが情報。情報が伝えられ、利用され、各人に咀嚼され、理解されたのが知識。その知識が共有され、広く受け入れられたものが知恵。その、データ、情報、知識、知恵を並べて、4層モデルとして表すと、とてもしっくりくる。前にも、そう書いた。

でも、しっくりくるのは、この「データ、情報、知識、知恵」だけではない。例えば「自然、工芸、デザイン、アート」とか、「体、手、頭、心」というような4層モデル。これらは、どこか「データ、情報、知識、知恵」に似ている。「体が生かされているのが自然」、「手が作るのが工芸」、「頭で考えるのがデザイン」、「心を表現するのがアート」というように考えれば、確かにしっくりくる。

データの「そこに転がっている」という感じ、情報の「意味を持つ」という感じ、知識の「考える」いう感じ、そして知恵の「信じる」という感じ。

データには人の関与のない自然が、情報には科学的な事実が、知識には社会が認める事実が、そして知恵には人間が信じる真実が、それぞれ似合っている。

「ある（be）、する（do）、考える（think）、信じる（believe）」とか「自然、科学、社会、人間」というような4層モデルも、そんなにおかしくないような気がする。

人は心とか、愛とか、宗教とか、哲学とか、本当に厄介なものをいろいろと考え出し、そういったものに縛られて生きてきた。それには間違いなく理由がある。その理由を探りたいと思うのは、ごく自然のことだと思う。理由を探す旅は脇に置いておくことにして、ここでは4層モデルについてもう少しだけ考えることにする。